大学の挑戦

平成22年10月2日～平成25年3月23日

平成25年

産経新聞社

近畿大

全国初 建築学部を新設

大学の挑戦

多様な思考の人材を育成

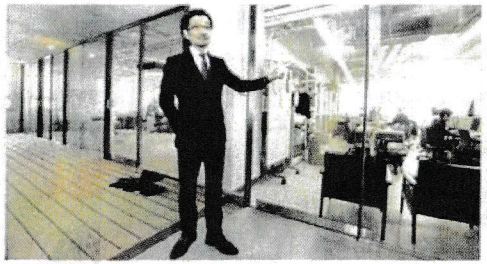
近畿大学本部キャンパス（東大阪市）。エントランスを全面ガラス張りにした斬新な建物がいま、学内でひときわ目を引く。今春、全国で初めてスタートする建築学部の新校舎だ。理工学部の建築学科などが入る築40年以上の33号棟を改修。外観だけでなく、講義室や研究室もガラスで統一し、内部がひと目でわかる。じつはこのデザイン自体、新学部の教育理念にもつながっているという。

学部長就任予定の岩前篤教授は「研究室を隔絶し、内部を仕切るのは、専門を細分化してきた古いアカデミズムの思想に基づくもの。教員や学生が何をしているのかを学内で共有できる『見える化』が重要なキーワードになる」と断言した。

□ ■

建築学部は理工学部建築学科の組織改編に伴って新設され、昨年の総合社会学部に続く13番目の新学部となる。建築学科を備え、定員は240人。１、２年次に幅広い基礎教養を身につけ、３年次から４専攻（建築工学、建築デザイン、住宅建築、企画マネジメント）に分かれ、専門教育を学ぶ。

近畿大は毎年、建築学科を中心に100人近い１級建築士の合格者を出しているが、新学部が目指す人材育成像は幅広い。建築士はもちろん、高齢社会に対応できる福祉住環境コーディネーターや都市計画の視点を備えた建築プロデューサーなど従来の建築工学の枠にとらわれず、時代のニーズに応えられる人材を養成する。



ガラス張りの研究室の前で「多様な人材を育てたい」と語る岩前教授

□ ■

「守り育てる建築」。建築学部のキャッチフレーズだ。その狙いについて、岩前教授は「建築分野はこれまでの壊して建てる世界から、ひとつの建物を長く大切に使っていく時代に変化しており、旧来の建築思想ではベストの答えは期待できない。環境問題や少子高齢化など21世紀型の課題を解決するためにも、伝統文化や社会学をはじめ多様な思考を持った人間が求められている」と説明する。

幅広い人材を募るため、理系中心だった受験科目を弾力化し、文系科目でも受験できるようにしたのも大きな特徴。この結果、すでにスタートした推薦入試では前年（理工学部建築学科）の２倍近い志願者を集めている。推薦入試で建築学部に合格した近畿大学付属高校３年の西井謙太さん(18)は「第１期生として学べるのがうれしい。将来、１級建築士になるという夢を実現したい」と語った。

近畿大　昭和24年、新学制により設立。法、経済、経営、理工、薬、文芸、総合社会（以上、東大阪市）、医（大阪狭山市）、農（奈良市）、生物理工（和歌山県紀の川市）、工（東広島市）、産業理工（福岡県飯塚市）の12学部を備え、約３万2000人の学生が在籍。今春、建築学部を新設する。建学の精神は「実学教育」と「人格の陶冶（とうや）」。

近畿大

成果実る教職教育部

大学の挑戦

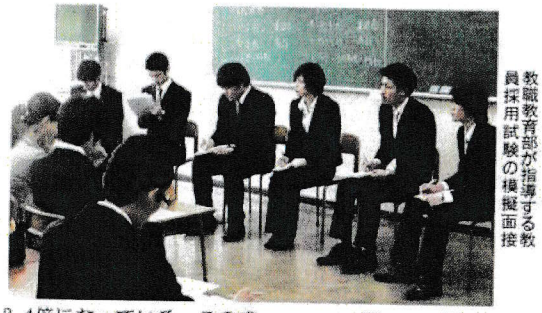
教員採用試験の合格者急増

昨年８月。近畿大学で夏休みを利用した集団討論が行われていた。「私語をやめない生徒をどう指導するか」がテーマ。意見を述べる学生に教職教育部の担当教授が「あなたの中学時代は？」「持論を述べるだけでなく、他の人の意見も引き出そう」と的確にアドバイスを送る。教員採用の１次試験合格者を対象にした模擬訓練の光景だ。

教職教育部は教育学部がない近畿大で教員を目指す学生を支援しようと平成元年に開設された。15人の専任教員のうち、半数以上が教育委員会などの実務経験者だ。模擬訓練は同部が無料で実施している「教員採用試験対策講座」の一環。３年次の９月から試験に必要な一般教養のほか、エントリーシートの書き方や面接対策、模擬授業など充実したカリキュラムに沿った実践的な指導が行われる。増田大三部長は「教員資格を得るだけでなく、実際に試験に合格して教壇に立てる人材を育成するのが教職教育部の使命」と語る。

□ ■

近畿大では公立学校の教員採用試験の合格者が飛躍的に増え、平成19年度の87人から20年度139人、21年度176人、22年度213人とわずか３年で2.4倍になっている。この成果を生み出したのは「教員採用試験対策講座」のほか、教育現場で実際の仕事を体験する「スクールインターンシップ」やEメールによる論作文講座など、教職教育部による手厚いサポートのたまものだ。



教職教育部が指導する教員採用試験の模擬面接

また全国的にも珍しい学生の自主サークル「教職ナビ」も大きな原動力になっているという。複数学部の１年から４年まで400人以上の学生が所属。毎週数回、志望教科ごとに学生が集まり、勉強会や面接・集団討論の模擬訓練などを通して切磋琢磨（せっさたくま）する。卒業生の若手教員も参加して後輩にアドバイスするなど、大学と学生組織が〝車の両輪〟となってフル稼働しているのがなによりの強みだろう。

□ ■

こうした取り組みは各学部の教職課程にも相乗効果をもたらしているようだ。増田部長は「教員採用試験合格という目標を学内全体で共有できたのは大きな成果。教員の意識が変わり、それが学生のやる気にもつながった」と分析。そして「学級崩壊が深刻化するなか、教育現場では教員の資質が問われている。人間力を備えた人材を育てていきたい」と力を込めた。

理工学部の卒業生で大阪府八尾市内の公立中学で数学を担当する松嶋由理華さんは「教職ナビのおかげでいろんな人の考えを聞くことができ、人間として成長できたと思います。そこで出会ったライバルの存在が試験勉強を頑張る支えにもなりました」と話している。

近畿大

「英語村」は学内の外国

大学の挑戦

遊びながら会話力養成

「日本にはホワイトデーがあるんだって？」

英国人講師のマーク・オースティンさんがテーブルを囲んだ学生たちに英語で問いかけると、即座に声が上がる。

「西洋にはバレンタインデーしかないそうですね」

文芸学部3年の宮澤かをりさん(21)。とても流暢(りゅうちょう)な英語だ。

2月4日午後。近畿大学本部キャンパス(東大阪市)。木造総ガラス張りの外観が印象的な学内の英語村、通称「イーキューブ(E[3])」で開かれたアクティビティーと呼ばれる活動の光景だ。この日のテーマは「バレンタインデー」。学生たちは英語のメッセージを画用紙に書き込んだプレゼントカードを作成しながら、マークさんと思い思いの会話を楽しんでいた。

□ ■

英語村は平成18年10月、「英語アレルギーを克服できる楽しい施設」を理念に開設された。E[3]はEnglish(イングリッシュ=英語)、Enjoyment(エンジョイメント=娯楽)、Education(エデュケーション=教育)の頭文字。語学習得に「娯楽」を取り入れたのが最大の特長だ。村長を務める文芸学部の北爪佐知子教授は「ここは語学はもちろん、英語圏の多様な文化にふれあえる空間。0時間フライトで体験できる学内の外国なんです」と語る。

プレゼントカードをつくりながら英会話を楽しむ学生たち

活動の中心となるのが、平日午後3回行われるアクティビティーだ。米国、英国、カナダなど英語圏出身のネーティブスピーカーの講師22人が常駐。スポーツやアートなど日替わりのテーマをもとに学生と一緒に活動する。料理がテーマなら、講師の出身国の料理を参加者で調理し、近畿大水産研究所が完全養殖に成功したマグロの刺し身が振る舞われたことも。つまり活動の目的はあくまでも「遊び」にあり、そのためのコミュニケーションツールが英語なのだ。

□ ■

英語村が開設されて約4年半。利用者は延べ約38万人に上り、大学が休みになる春と夏の年2回は一般利用者にも開放されている。英語と自然に親しめる環境の効果は学生の語学能力の指標であるTOEIC(トイック)にも如実に表れており、数年で100点以上アップする学生も少なくない。

1年次から英語村に通っている宮澤さんの場合、TOEICは大学入学時の710点からわずか1年半で870点になった。昨年3月から10カ月間、米国に語学留学し「英語村で培った会話力が大いに役だった」という。北爪教授は「遊びを通して鍛えた英語力はもちろん、就職活動の大きな武器にもなります」と話している。

近畿大

進化する生物理工学部

大学の挑戦

社会変える挑戦スピリット

「歯のばんそうこうで虫歯を予防」。昨年9月、近畿大学発の研究成果がこんな見出しで新聞各紙を飾った。生物理工学部(和歌山県紀の川市)の本津茂樹教授のグループが歯への生体親和性に優れた「極薄シート」を大阪歯科大学と共同開発し、実用化に乗り出したというニュースだ。

このシートは、骨や歯の主成分である「ハイドロキシアパタイト」を特殊技法で0.02[ミリ]以下に加工したもの。歯のばんそうこうとして虫歯や知覚過敏の予防、歯を白くする審美歯科への応用も期待でき、世界的な注目を集めた。細井美彦学部長は「歯や骨のような硬い素材を電子技術で自由に変化させ、生物の体の中で再生する。まさに生物理工学部ならではの発想。本学部には他にも多くの優れた研究成果があり、それが学生の意識を高め、学部教育全体の質の向上にもつながっている」と語る。

□ ■

生物理工学部は平成5年、「生物に学ぶ工学」をテーマに設立された。開学からまだ18年だが、大学院や近畿大先端技術総合研究所(和歌山県海南市)と連携した先進的な研究が高い評価を受け、世界をリードする研究教育拠点を支援する文部科学省の「21世紀COEプログラム」にも選ばれている。

体細胞クローンマウスの作製に成功した西山さん

こうした成果を支えているのが手厚い基礎教育だ。たとえば、実践的な「バイオテクノロジー技術論」や「ロボット技術論」など幅広い研究領域を用意し、学生がより早い段階で自分の専門分野を見つけ出せるシステムを構築。この結果、学生の研究活動でも成果が実り始めている。19年、20年には当時の4年生が成功率2%とされる「体細胞クローンマウス」の作製に相次いで成功し、国内最年少記録を2年連続で更新した。研究に携わった森田真裕さん(25)は大学院生物理工学研究科を修了し、昨年、医薬品研究機関「中外医科学研究所」に入社。同じく大学院生の西山有依さん(24)も今春から教育機関への就職が決まるなど、卒業生の多くが優れた就職実績を残している。

□ ■

バイオテクノロジーは食糧生産や環境問題など21世紀型の課題解決に向け、最も期待されている研究分野だ。同学部では昨年、こうした時代のニーズに合わせた組織改革に着手。それまでの生物・電子情報・機械の3系統を中心にした学科編成(5学科)を改め、工学・農学・理学・医学など幅広い学問の融合を目指すライフサイエンス(生命科学・生活科学)系の学部(6学科)に生まれ変わった。

細井学部長は「ライフサイエンスという幅広い学問分野から生まれる研究が社会を変え、人材を育てる。失敗を恐れず、つねに挑戦するスピリットが新しい時代を開拓する」と断言した。